

地域特性にあつた国際交流を推進 —姉妹提携交流を基盤に

では実際にどのような交流活動が行われているのでしょうか。

熊本県と姉妹交流しているのは、米国・モンタナ州（一九八二年七月調印）、大韓民国・忠清南道（一九八三年一月調印）、中国・広西壮族自治区（一九八二年五月調印）。姉妹提携が地方の国際化の第一歩、国際交流のきっかけとして全国的なフレームの様相を呈した時期に結ばれたものです。そして今日まで、各地域の特性に合った交流を推進しています。

例えばモンタナ州とは、モンタナ産のビールとツーバイフォー建築資材を熊本が中心となって輸入販売するなど、全国的にも数少ない経済交流が行われています。ジャパンバッシング（日本たたき）で有名なモンタナ州出身の上院議員が故郷で対日強硬論をぶつたところ出席者からソッポを向かれ、「日本は最大のお客様なのに」という声が渦巻いたという逸話がワシントン・ポスト紙に報道されました。そして、その記事がパリ発行の英字紙ヘラルド・トリビューン、アジア・ウォールストリートジャーナル、ニューズウイークリー日本版へと次々に転載されたことは、草の根レベルの経済交流に国际的評価を受けたといえるでしょう。今年秋にはモンタナの駐日事務所が熊本に開設される予定です。日米間の貿易摩擦が問題となる中、大韓民国・忠清南道とは現在、県内の三十以上の団体が姉妹提携をし、民間レベルで幅広い交流が行われています。過去に不幸な歴史があつたことをふまえた上で、次代を担う韓国人たちに実際に熊本に来てもらつて、お互いの国への理解を深めあう、長い眼で見た青少年交流、精神的交流が、大学間交流や職員の相互派遣などござれています。昨年一月に、韓国の高校生が、日本への初の修学旅行として熊本を訪問ましたが、熊本の高校生との交流の成果も大きく、今後の交流に明るい希望をもたらしています。

一方、姉妹交流のないヨーロッパとの交流はどうでしょう。熊本ECC協会、日独協会、日仏協会等民間団体での交流活動がなされていますが、この中で熊本ECC協会では、ECC諸国の学生がホームステイしながら企業で実地研修を受ける「インター・ホームステイ」制度をスタートさせ、今年も7月からフランス・リヨン商科大学の学生三人が地元の金融機関、ホテル、百貨店等で研修することになっています。熊本ではまだヨーロッパとのつながりが薄く、人的交流もわずかですが、こういう試みから刺激を得、国際理解を深めているところです。また、ヨーロッパからは、街づくり、歴史観、アーティーについての考え方、文化の吸收など、地域づくりのモデルとして、有形無形に学ぶことができるものが多々あります。

他方、アジア太平洋地域との交流も課題です。各国の地域性や住民感情とともに、これまでの我が国との関わりあい等をふまえた上で、熊本らしい交流のあり方が検討されています。



県民の国際感覚を養成 —JETプログラムとホームステイカントリー熊本づくり

こういった活動の基本として、県民一人一人の国際感覚の養成が求められます。そのための施策の一つがJETプログラムと呼ばれる外国青年招致事業です。これは、地方公共団体、自治省、文部省、外務省の共同事業として、語学教育の改善と地域レベルでの国際交流の推進を図るために昭和六十二年からスタートしました。当初熊本が受け入れた外国青年は三十二人でしたが、平成二年には七十九人となる予定で、AET（英語指導助手）、CET（国際交流員）として、県国際課、県立女子大学、県内の高校（二十三市町村）に分かれて活動します。特に市町村での受け入れは、昭和

姉妹提携交流



忠清南道からの派遣研修職員
クォン カブサン
權 鍾淳 さん(43才)

昨年4月、忠清南道の沈天平知事が来熊した際に、熊本県知事との間で、今後進めていく姉妹提携交流の一つとして、忠清南道府職員の熊本県研修を合意。平成2年5月から6ヶ月間、忠清南道職員3名が2ヶ月ずつ熊本県庁において研修する。權さんは第1回目の来熊職員。

熊本県行政の、住民に対する広報活動を学ぶために来ました。今、韓国では、地方自治制度実施の準備が進んでいますので、その点も含めて多くのことを学んで帰りたいと思っています。海外に出るのは初めてのことですが、熊本は緑が多く、熊本城も水前寺公園も美しい。街全体が整備されていて、まるで公園のようですね。来てまだ間もないのですが、こちらの人はみんな忙しそうに見うけられます。忠清南道は産業、地形については農業が中心で、西海岸に国立公園があるなど熊本県と似ている点もありますよ。

